

第 1 部 チャレンジの 4 5 年

NPO 法人日本アビリティーズ協会 会長
伊東弘泰

- 第 1 章 「保障よりもチャンスを！」
- 第 2 章 運動の根底にある少年期の体験
- 第 3 章 学生時代の貴重な体験
- 第 4 章 アビリティーズ運動の始まり
- 第 5 章 障害者による障害者のための会社
- 第 6 章 営業拡大に全力疾走
- 第 7 章 ハンセン病の人々と鈴木智子さん
- 第 8 章 労働大臣に面会
- 第 9 章 福祉機器事業の創業
- 第 10 章 商品開発の第一号は食器
- 第 11 章 海外メーカーとの提携
- 第 12 章 各地の拠点づくり
- 第 13 章 ブックセンター『スクラム』の開店
- 第 14 章 “旅、”で人生が変わる
- 第 15 章 ライフサポートプログラムの始まり
- 第 16 章 施設サービス事業の創業
- 第 17 章 障害者差別禁止法の制定をめざして
- 第 18 章 これからのアビリティーズ活動

第 1 章「保障よりもチャンス！」

一九六六（昭和四一）年四月十七日の夕刻、日本アビリティーズ協会の創立集会在東京・蒲田の大田区産業会館で行なわれた。新聞やラジオ、テレビ等で集会のことを知った心身に障害のある二百人の人たちが、会場につめかけた。

会場の正面には、「保障よりも労働の機会を」の文字が大きく書かれていた。夕方四時から、実に夜九時過ぎまで、会場は熱気で満ち、興奮が続いた。

最後に、アビリティーズの綱領を全員で朗唱するときの一人ひとりの顔には、力強い意気込みがはっきりと示された。慈善や同情に甘えたくない。まず、自らのもてる能力を發揮してみたいという決意の顔であった。

創立集会の行なわれる前年、私が大学四年の時に、ある雑誌に私の短い投稿が掲載された。それは、自らの体験から、

「障害があっても、積極的に自分の人生を展開していこう、やればできる」という内容の、ほんの四百字程度の短い文章だった。

私はもともと、自分が障害者であるにもかかわらず、障害のあるほかの人たちに対して、つとめて無関心を装ったり、無視したりする人間だった。

歩いている道の向こうから、からだに障害のある人が歩いて来ようものなら、まるで自分の歩く姿を鏡の中にみているような恥ずかしさにおそわれ、意識的に視線を別のところに向けていた。

「自分は障害者でありたくない」との願いが、何事も精いっぱい試みようとする強い意志をもつことになったものの、ほかの人に対して、

「彼らだって自分の力でやればいいのだ」という冷たい気持ちしか、それまでの私にはもてなかった。

●短い投稿に思わぬ反響

この雑誌が発行されたあと、私は全国から五、六十通の手紙を受けとった。ほとんどが同感、共鳴の内容であった。

しかし、そのどれもが、自分の力でやりたくてもできない人たちだった。重度の障害のため、友達どころか家族以外の誰とも話をする機会のもてない人たち、人の目を気にして、家から出ないで生活をしている人。自信をもてず、苦痛の中に日々を送っている人たちの姿に、私は初めて触れたのだった。

連日送られてくるそれらの手紙を読んでいるうちに、私は次第に沈痛になっていった。たしかに、私の場合、障害は重い方ではないし、周囲の助けもあって、なんとか普通にやってくる事ができた。

しかし、そんな私も子供の頃、仲間はずれにされて、ひとり淋しく遊んでいたこと、運動会にも遠足にも参加できず、とり残されていたことをあらためて思い出した。

また、高校を卒業して私は一時就職したのだが、その就職試験の際も「身体障害者は採用しない」との理由で、大手企業を中心に約百社から、試験の前に応募書類が返送されたり、電話で問い合わせても断られたりした。

そんな屈辱を、新たにしていた。

届いた手紙を読み返して、私は、障害のある人々にも、何かに打ち込み、自信をもって、積極的な生き方のできる、そんなチャンスを得られることが必要だと思った。そして、最も有効なことは、「仕事」の場を確保することであった。

私は次第に、障害者が中心になって働くことのできる職場について夢を描いていた。

「第2章 運動の根底にある少年期の体験」

●ポリオで右下肢マヒに

私は一九四二（昭和十七）年二月東京・浅草生まれ。太平洋戦争で、日本が勢いの最もよい頃であった。父は私が一歳になる頃、四三（昭和十八）年に軍隊に召集されて満州に配属された。

その直後、私はポリオ（脊髄性小児マヒ）を患った。高熱が引いたあと、両脚はすっかりマヒしていた。

私は自分の脚でしっかりと歩いたことがない。「走る」ということがどんなことか、自分のからだではわからない。

父の出征後から小学校入学直前まで、母の実家の千葉県君津郡、今の袖ヶ浦市の農村に疎開していた。入学前の身体検査を千葉の田舎の小学校で受けた。

教師か医者かよくわからなかった人たちと母が、私のからだのことで深刻な話をしていたような情景が記憶にある。「就学免除」にひっかかりそうだったのだ。

●悪ガキとの格闘

その頃父がシベリアでの抑留からようやく解放されて復員した。母と私は東京に戻り、父の実家のある羽田に住み、羽田空港の近くの小学校に入学した。私はよくいじめられた。通学のときはいじめっ子のいない道を探したものだ。

ある時、六歳下の妹を連れてどこかに行く途中で、日頃からとくにいじめのひどい悪ガキに出会ってしまった。しかし、畑道で誰も通らなかった。

彼は私の回りをめぐりながら、いつものように「チンバ」、「バンチ」とはやしたててつ

いてきた。そこで私は考えてもいなかった行動に出た。

その悪ガキにもたれかかるようにつかまり、力のすべてをもって抱きつき、道端にころがった。肘で突き、小さなこぶしで悪ガキのからだを手あたり次第ついた。相手のほうがもちろん圧倒的に強いはずだったが、私は彼のからだにしがみついて決して離さなかった。

地面にころげまわって五分かそこいらやっていたと思う。やがてどちらからともなく離れた。二人とも泥だらけだった。

この悪ガキには閉口していた。とにかく、しょっちゅう待ちかまえてはいじめるのだ。母にも何度か訴え、母はその悪ガキの母親に話にしてくれた記憶がある。それでも、くりかえされていたので我慢の限界を越え、向こう見ずにも、ついにとびかかってしまったのである。窮鼠猫(きゅうそねこ)を囓(か)んだ。

そのことがあってから、悪ガキの「鈴木クン」は、二度と私をいじめることはなかった。出会っても、それからは彼が道の端によって私を避けていった。

今なお日本の社会では、心身に障害のある人たちが差別されている。多少の改善はあるが、我慢ならないことがまだまだ多い。

普段できるだけ穏やかに、そういった理不尽なことを改善してもらおうと働きかけているが、耐えられず、猛烈に抵抗を試みることもある。思えば、鈴木クンに対したときと同じなのかもしれない。

●普通学級での学校生活

小学校に入学して以来、体育の授業はいつも「見学」だった。毎年秋の運動会は、天空にこだまする花火や綱引きの歓声にもかかわらず、私の心は暗かった。ある年、先生から徒競走のピストルの火薬づめの役を指名された。運動会では唯一の楽しい思い出であった。

また、年に二回の遠足は私にとって最悪だった。その前後の何日間か、クラスの仲間たちは、ちいさな「旅」の話題でいっぱいだったが、私はその話の輪に入ることができなかった。

小学校から高校までの十二年間に私が参加できたのは四回だけだった。それも、父におぶわれていくか、バスのときであった。

養護学校などない時代だったから、私は普通に学校に通うことができたのかもしれない。悪ガキの鈴木クンにはまいったが、からだの弱い私を支えてくれる友人たちも数多くいた。通学の往復では、カバンをもってくれ、ゆっくりと一緒に歩いてくれた。

私を無理やり三角ベースの野球のバッターに立たせ、バットを握らせてくれた友もいた。しかし、学年があがるにつれ、友達の行動に次第についていけなくなっていった。

●あわや入学拒否

都立京橋商業高校に進学。その合格発表のとき、別室に呼ばれ、初めてお会いするその

高校の先生から、からだのことを遠慮がちにいろいろ尋ねられた。

卒業後数年して、恩師からはじめて聞いたのだが、危うく入学拒否にあうところだったのだ。テストの成績は良かったのに、入学選考の職員会議で、古株の体育の教師の、

「入学しても体育の実技のできない生徒の入学は困る」

との発言で、入学不許可にほぼなりかかっていたそうである。しかし、K先生の、

「体育の実技を受けられないからといって、勉学の機会を失わせるべきではないはずだ」
との熱弁で、職員会議の空気は一変し、入学が認められることになったそうだ。後にわかったのだが、その先生には、障害のあるお子さん、しかも私と同年代の方がおられたのであった。

三年間の高校通学は、私鉄、国鉄、バスと、乗り換えを含め往復三時間。ラッシュ時の電車は命がけでとても厳しかった。しかし高校生活を通して、私のその後の人生において、いろいろな影響を及ぼしてくださることになる多くのすばらしい友人や、先生方に出会うことができた。

●衝撃の就職活動

戦前の旧制中学からの歴史をもつ母校からは経済界に多くの先輩がおり、就職先にも恵まれていた。

三年生の夏、一斉に就職試験が始まった。友人たちは、第一週目の試験で就職先がどんどん決まっていく。

私も学校から志望先に書類を送ってもらったが、それらはすべて試験日の前に返送されてきた。その翌週も、またその翌週も同じ。

「当社では障害者は採用しない」

という、はっきりした理由がついていた。

私は愕然とした。受験して落とされるのは納得がいく。しかしその「機会」さえ与えられなかったのである。

私は、学校に求人資料を送ってくる会社に片端から電話をかけまくった。

「私には身体障害があります。しかし仕事は一生懸命やるので、受験させてください」と、一社ずつ丁寧にお願いした。しかし断られるばかりであった。

高校の頃、私の脚の機能はそれ以前より落ちて、友人たちの、ふつうの歩くペースにはとてもついていけなかった。

友人とつきあえないから、勉学に時間の多くをとることになった。珠算、簿記会計も一級に合格、成績についても自信があった。

にもかかわらず、就職試験でのこうした状況にあったことは私にとって余りにも大きな衝撃であった。

悩んでいた私に恩師は、

「大学に進んだらどうか」
と助言して下さった。しかし、私はその選択肢をもっていなかった。父は、長期のシベリア抑留から帰ったあと、万年筆製造の職人として小さな工場を営んでいたが、父の二人の弟たちに喰われっぱなしであった。

能力もないのに会社を経営していた父の第二人は、手形の決済や銀行への返済にと、年中、父の金を持っていった。父ばかりでなく、父の兄の家も相当の被害にあっていた。

私が中学三年の四月、夜中に隣家から出た火災で、わが家族五人は命からがら窓から脱出した。そのときの火災保険金まで、すべてを弟たちの会社にもっていかれてしまった。

盗人にも近い叔父たちに利用されっぱなしの父、そのために辛酸をなめてきた母を、一日も早く楽にさせることが私の願いであった。

●証券会社に採用される

次から次へと電話をかけていたら、八千代証券（のち国際証券、現三菱 UFJ 証券）の人事課長さんが、

「試しに受けてごらん下さい」

と対応して下さったのである。初めてのことであった。

一次を終え、二次試験の役員面接で、

「君、歩いてごらん」

とその面接の途中、役員たちが居並ぶ前で、歩かされた。

こんな屈辱的な思いをしたものの、私はようやく採用されたのであった。

採用されたのは恩師のお蔭でもあった。私が初めて就職試験を受けられるということを引きいて、所属していた珠算部の顧問、杉山正勝先生が試験の前に会社を訪ね、私のことを PR に行ってくださっていたことを後日知らされた。私はお蔭で救われた。先生には感謝しても余りある。

当時の平木三郎社長は、同社再建のため大手証券会社から派遣された方だった。短期間で建直しを実現し、急成長の時期に入っていた。

グングン伸びる成長企業はとにかく猛烈に忙しい。私のような社会のことを知らない新入社員でも、難しい仕事、知らない仕事にも取り組まざるを得ない。経済のしくみや金融制度についても自分で勉強していかなければならない。私にとってとても良い環境だった。

一九六〇（昭和三五）年。戦後復興は一段落し、企業は成長をめざし活発だった。本格的な発展途上にあつた。毎日、仕事を持ち帰り、家でも仕事にとり組んでいたが、私は次第に自分の非力さを感じていた。

●必死の猛勉強

入社して二年目、もっと基本的な学問の力をつけるため大学進学を決意し、昼は仕事に、

夜は御茶ノ水の駿台予備校に通うことにした。

なにしろ商業高校では商業科目の時間が多く、一般教科は時間数も少なく不十分であった。予備校での授業についていくのも至難であったが、とにかく夢中で勉強した。夜十一時過ぎに帰宅し、さらに夜中の二、三時まで、仕事と受験勉強の毎日が続いた。それ以来は今でも一日平均四時間半の睡眠で足りるようになった。歩いているときは英単語の暗記の時間だった。

そんな努力の甲斐あって、早稲田大学商学部に入学、新しい生活に入るようになった。

「第3章 学生時代の貴重な体験」

●二足のわらじ

入試合格を得た翌日、早速、勤務先の T 常務に報告にうかがった。詳しく話をする前に、T 常務は、

「伊東君、仕事はしなくてもよいから勉強を一生懸命しなさい。会社に在籍のままでもいい、給料もそのまま支給するから頑張ってみなさい」

と言われた。それほどの好意を一方向的に浴びせられた私は、「退職」を言い出せなくなった。

私ごときにくださったトップの配慮に驚き、感謝で胸熱くなるものがあった。このご恩に少しでもおこたえせねばと、感じ入った。

勤務を続けることにした私のそれからの生活は、普通の学生の生活とは程遠かった。授業は週三日にまとめ、それも午後から夜に集中して受け、その午前中と、他の三日間は会社の仕事に没頭した。当時は土曜日も午後三時まで勤務であった。会社では深夜になることもしばしばで、よく終電で帰宅した。授業の日はたいてい仕事を持ち帰り、自宅で夜遅くまでかけてやり上げていった。

●心に響いた「世の中の役に立て」

大学二年生になり、こうした二本立ての生活が次第に私の心身にこたえだしてきた。そこで、ついに会社に退職を願い出ることを決心した。平木三郎社長は私を採用してくれた恩人である。

これまでの感謝、そしてわがままな行動に許しを乞う私に対し、ふだんの厳しさとは異なり、

「この会社に恩義を感じなくてよい。君が世の中のために何かしてくれることがあれば、それが恩返しだ」

と、慈愛に満ちた言葉をくださった。このことは五十年余たった今でも忘れられない。

その会社に在籍した三年間、私は社長をはじめ何人も素晴らしい方々に出会うことが

できた。のちに私が日本アビリティーズ社を設立して印刷業を始めたとき、応援するように発注を継続的にくださったのも、この会社であった。かつての私の上司は、同社の要職を退職されたあと、当社および日本アビリティーズ協会の常勤相談役として長くご指導くださった。十歳先輩の梶 秀俊氏である。私は氏を尊敬する大先輩として今も何かあればご指導いただいている。

また、私が退職して十五年も経った後に、この証券会社の分厚い三十年史の企画・編集を発注してくださった。このとき平木社長は会長になられていたが、三十年史の取材のため、二時間にわたってのインタビューの機会を与えていただいた。そこで、昔のご恩に対して、あらためてお礼を申し上げることができた。

●二年がかりの会社再建

証券会社を退職し、学生生活に集中できると思ったのも束の間、今度は、父の二人の弟が経営する小さな会社がいよいよ倒産か、という事態に陥っていた。

二人の叔父は、父やその上の兄にたかっていた。わが家のわずかな金もありつけ持っていったのである。

倒産となると私の一家にとっても、これは一大事であった。貸した金ももどってくる可能性はなくなる。その頃、もはや、わが家で自由になる金などほとんどなかったようだ。父はお人好しで断りきれずにずるずると、弟たちに利用されるばかりだった。

経理がわかる、ということで、証券会社を退職してまもない私は、倒産目前のその会社の整理の手伝いに呼ばれた。実務には素人の私でも、一目でこの会社はもう駄目だと判断した。従業員三十人程の、鍛造・熱処理等の工業窯炉の設計・製作が主体の、小さな会社だった。

払う金がないとわかっていても、債権者は次から次へと取り立てに来る。しかし、二人の叔父は、用事を作ってはどこかに姿を隠してしまう。債権者会議の準備や整理をしながら私が対応に出る。実状について、正直に分かるだけの話をするしかなかった。

様々な後始末に追われていたとき、当時の三井銀行蒲田支店の山崎大介次長さんから、
「君が再建の管理をするなら必要な運転資金を出そう」
という話をいただいた。条件は二つ。私が全役員の実印を預かること、新規の手形割引融資を三井銀行で行なうたびに、その一割を旧債務の返済に充当すること、であった。この申し出は会社を再建できる唯一の方法に思えた。後でわかったことだが、この次長さんには心身に障害のあるお子さんがおられた。

●逆境に学ぶ

銀行からの条件にヒントを得て、一般の仕入先に対しても全ての債権を期限をつけずに棚上げしてもらうこと、そして毎月の仕入れ額の三%相当分を旧債務の返済分として上乘

せして支払うことを提案した。再建に協力してくれることにより返済が可能になることを説明した。そして、債務は時間をかけてでも全額支払うことを約束した。これでほとんどの仕入れ先が協力してくれることになった。

債権者の中には、いわゆる街の金融業者もいた。返済の時期と方法について説明に行ったとき、その筋と思われる連中に囲まれ、かなりのことを言われた。目の前の木製デスクには刃物の跡が幾つもついていて、二か月後に約束通り返済に行ったら、驚かれた。倒産した会社で約束通り返してくれたのは初めてだと言われた。

生まれて初めて質屋も訪ねた。倒産の前に、会社は電話を担保に金を借りていた。忘れもしない、のれんには「立花屋」と書かれていた。

実は、会社は叔父の、「接待」と称しての派手な遊びや競馬、賭け麻雀、ゴルフ遊びなどでの浪費、散財がもとで倒産した。しかし、本来の商売では十分に利益が上がっていたので、再建の見通しはあった。

実際に、私が管理責任をになってからまもなく経営は軌道に乗り、債務の返済も順調にいきだした。

それにつれて営業も拡大に向かい、二年後には協力いただいた三井銀行はもちろん、すべての銀行の旧債務、それは結構大きな額だったが完済した。仕入先の債務も次第に減少、再建もひと段落ついたと判断し、大学卒業と同時に私はこの会社から手を引いた。

しかし、叔父達のもって生まれたいいかげんな性格はしょせん直るものではなく、数年にしてまた経営は悪化、結局倒産し、再起不能となった。父のところには一銭も返済されぬままであった。母はよく嘆いていた。

● トップのあり方を知る

この経験を通して私の得たものは大きかった。会社は絶対に倒産させてはならないこと、社員やその家族の生活のために、またお客様やお取引先のためにも、会社は常に安定して繁栄させねばならない、ということである。

また、仕入先の協力があって、はじめて、事業が成り立つことも痛感した。

再建にあたった当初、私は支払日の四、五日前から仕入先や外注先三十社ほどに、小切手を直接届けて回った。遠くても自転車に乗って届けた。支払日当日以前にすべて小切手はお届け済みだった。ご迷惑を詫びながら、またさらなる協力をお願いをした。そんなことを重ねていると、

「あなたの誠意はわかった、わざわざ代金を届けにくることもない、こちらから出かけるから」

と皆さんが言うてくださり、ますます協力してくれるようになった。

また、借入金の返済は期日を厳守すべきことを学んだ。約束を守ることが信用の第一である。

さらに、会社のトップは、遊びでうつつを抜かすことは絶対にしてはならない。常に社員の先頭に立って、誰よりも働くこと。社員はトップの後姿を見て同じように頑張ってくれる。交際費を使つての商売は真のビジネスにあらず、ということも体得した。

当社が設立以来四五年間、交際費を使うような経営をしないできたのも、このときの体験からだ。また私自身もゴルフ、麻雀等、遊び事は一切しないことはもちろん、華美を慎み、質素な生活こそ大切と考え、徹してきた。私自身、自分の財産はもたず、生活費以外のものすべてを事業に投入してきた。

●施設見学でみたもの

会社再建にかかって二年、授業に出られない日も多くあったが、とにかく頑張った。四年生の夏、卒業後の計画づくりをはじめた。私の学友の中に何人か、からだに障害のある人たちがいた。大学生活も残り一年足らず、皆、就職問題では絶望的であった。かつて私が高校時代に体験したことと同じ状況が、からだに障害のある友人たちの身にふりかかっていたのである。

そんな大学四年の夏、私は東京周辺にある障害者の授産施設等をできるだけ見学して歩いた。

それらはだいたい人里離れた田園や山の中にあつた。そこでの仕事は、買い物袋のヒモ付けや、電線の皮剥きといった作業で、仕事らしいものではなかつた。月に得られる「手当」は当時の金で百円程度。それも月に一度、仲間と街に出てパチンコをして終り、とのことだった。

将来への夢もないようだった。入所者たちは仕事に対する喜びをもっていない。行く所がないからそこにいる、という感じで、どうしても私の感覚とはあわなかつた。

とにかく、仕事というものではなく、時間潰しのためにやらされているような感じで、「内職」以下のものだった。私が仕事の世界で体験したような緊張感や多忙さ、また会社再建にあつた時のみなぎった思いは皆無だった。

この見学を通じて、私はたとえからだに障害があつても、より生産性の高い仕事、張り合いのある仕事を得て働けることが大切だと確信した。

どんな障害があろうと、それぞれの適性を見出し、技術を高め、高度の機械を有効に活用する、企業性の高いものであるべきなのだ。

夏も終わりの八月末、私は身体障害者による身体障害者のための会社づくりを真剣に考え、夢を描き始めていた。

(次回に続く)